

[特別講演 1]

動物の行動学に基づいた野生動物による被害対策～シカ、イノシシ、サル～

江口 祐輔（国立研究開発法人 農研機構 西日本農業研究センター）

農作物被害の概要

我が国の野生動物による農作物被害は大きな社会問題となっている。野生鳥獣の捕獲頭数はうなぎ登りであるにもかかわらず、被害金額は200億円前後で推移しており、被害面積についても同様な傾向が見て取れる。なぜ被害対策が進まないのだろうか？

被害対策が成功したかどうかは、作物の収穫が出来たか、または当事者である農家が「農作物は守れる」という実感が得られたかどうかであろう。しかし、各地の対策会議では、捕獲数や柵の設置距離が報告されるだけである。被害減少ではなく、対策自体が目的化してしまっている。

被害はなぜ起こる

野生動物は農作物だけをねらって田畑に侵入しているわけではない。人里に餌があると確信した個体が餌を食べに来る。かつては人が利用するために植えた山沿いのクリ、カキ、ビワなど、今は誰も利用しなくなった実を動物たちが見つけるようになった。人里の境界付近で野生動物はとてこれまでに経験したことの無い美味しい餌の存在を学んでいく。くず野菜などの収穫残渣の放置も餌付け行為になる。これらの餌はイノシシ、シカ、サルの餌になっても見過ごす、あるいは許してしまう傾向にあるが、特に冬季の餌は野生動物にとって生存が厳しい季節の栄養補給源となり、本来なら餌不足で死亡してしまうはずの個体を生かすことになる。捕獲効率を上げたいのであれば、獲るだけではなく、増やさないとこの視点の対策も必要である。

個体数調整と加害獣の捕獲の誤解

近年、個体数調整に関する記事が目立ち、多額の予算の投入が報じられている。本来、農作物被害を防ぐには、農作物の味を覚えた加害個体や人里を中心に餌場としている個体を捕獲対象とするものである。一方、個体数調整の目的は、自然環境などに影響を及ぼす野生動物を捕獲し、自然植生への影響が小さくなるまで密度を減少させ、生態系を守ることである。したがって、個体数調整のための捕獲は農作物被害対策において必要な加害個体の捕獲を意識したものではない。

動物の行動を探る

これらの問題を客観的に把握し、改善するためには野生動物に対する正しい理解が必要である。人間の目線ではなく、野生動物の目線に立って彼らの行動を理解することで、被害を減少させるための被害対策が見えてくる。